

ロールシャッハ・スコアリングシステムの交流 (1) Exner 法に片口法の視点を導入することの意義

東海学院大学人間関係学部 明翫 光宜^注

中京大学心理学部・心理学研究科 八尋華那雄

Interchange between the Exner and Kataguchi scoring systems (1) -The advantages of the Kataguchi system-

MYOGAN, Mitsunori (Tokai Gakuin University)

YAHIRO, Kanao (School of Psychology, Chukyo University)

Now in our country, mostly two systems-Kataguchi's and Exner's -are used for interpretation of the Rorschach data. The authors have observed and reported (2004~2007) the difference between the two systems. This time, we propose to introduce some Kataguchi's ideas being of benefit to Exner's system.

For example, in sequence analysis, we could have better and detailed understandings of the process on conducting stimuli when attempting to add the findings from information concern about reaction time and ideas of sub-categories of location Dd.

Furthermore, we suggest that there could be a good possibility to widen the understandings of testee's originality and pliability of his/her personality, which we do not discuss in the Exner's system.

Key words: Exner system, Kataguchi system, originality, flexibility

I. はじめに

筆者らは、これまで片口法と Exner 法のスコアリングシステムについて異同の検討を施行法から解釈過程まで行ってきた(八尋・明翫, 2004-2007)。しかし、両システムの異同の検討のみでは、どうしてもどちらのスコアリングシステムが望ましいかという視点に傾く恐れがある。

しかし、筆者らは、ロールシャッハ・プロトコルを片口法、Exner 法のそれぞれのシステムで記号化し、解釈していくにあたって、両システムが相補っていける視点があることを経験している。そこで筆者らは、両システムの異同を理解した上で、それぞれの視点をどのように活用するかについていくつか提案したい。

本論文では、明翫が Exner 法のシステムに片口法の視点を導入する視点を提案し、八尋が検閲するという手続きをとった。

II. Exner 法に片口法の視点を導入することについて

(1) 施行法について

Exner 法は、コード化を正確に行えるようロールシャッハ反応を収集することが被検者の正しい理解につながるため、施行法は厳密である。一見、例えば「反応数が 14 個未満の場合や反応拒否は認めないこと」、質疑段階での「何がそのように見えたのか判りません」「よく判らないのですが」といった文言から推測すると冷淡なテスター像を連想させる。これらの点は、テスター・テストの関係性を重要と考える臨床心理士には異和感があるかもしれない。この点を片口法の施行法から眺めてみる。

八尋・明翫(2005)で触れたように、片口法での施行法はアセスメントであると同時に「心理面接」「関与しながらの観察」という側面も重視している。それゆえに、検査データとしては曖昧さを残すことも許容することがある。例えば、「反応数が少ないこと」「反応を出せないこと」も 1 つの特徴と捉えるし、反応の追加や取り消しなども被査者の主体的な営みとして認めている。このように Exner 法では十分なデータとはならないため認められない対応

注 m-myogan@tokaigakuin-u.ac.jp

があっても、被検者の言動の1つ1つを尊重して受け止めていく姿勢に学ぶところは多いのではなからうか。

また反応時間の計測においても、包括システムでは他のロールシャッハ変数との相関が認められなかったゆえに次第に計測しなくなっていったという流れがある（包括システムによる日本ロールシャッハ学会, 2003）。一方、片口法では、反応時間は他のロールシャッハ変数との関連ではなく、被検者の取り組みや態度を推測、あるいは追体験するために用いられる。そのように考えていくと反応時間には数値で示されないが被検者のパーソナリティ理解に活用できる側面が多くあるように思われる。

(2) 領域について

Exner法の領域のコード^aは、例えばWやDなどのスコアは、かなり明確に規定されており、例外的領域の使用はDdとされる。一方、片口法の領域は、規定された領域（W, D, d, S）以外はDdとし、Ddは更に大きさや用いられたプロットの特徴（辺縁dr, 内部di, 微小dd）そしていずれにも該当しない（dr）など細かな分類がなされる。それゆえ、片口法の領域のスコアリングは以下のように継起分析の中で被検者の把握のあり方を捉えていくのに有効な手がかりを与えてくれる。

- ① 反応にいたる把握のプロセスを領域スコアが示唆していることである。例えば、Wはインクプロットの余分な側面が気になり、切断するという被検者の行動である。D→Wは、最初はD領域を見ていたが後にW領域まで反応を拡大したというプロセスが反映されている。このように片口法のスコアには、そのスコア自体がその反応のプロセス（反応産出過程）を示すことがある。しかし、Exner法では最終的に

どの領域になったかでコーディングされるので、この反応産出過程の特徴を解釈仮説に組みこんでいくことが出来ない。したがって、片口法の領域の知見があれば、刺激の処理過程を分析する中で、被検者の認知プロセスを追体験することが出来る。

- ② Ddスコアの下位分類をする際に、Exner法のDdスコアに並行して片口法のDdの下位分類を用いると、その被検者にとってのDdの心理学的意味が理解しやすくなる。例えば、Wやd, ddなどは強迫的防衛を示唆している点などである。

このようにExner法と片口法を並行して記号化していくことが被検者のパーソナリティ理解を深める可能性を含んでいる。

(3) 形態水準評定について

片口法とExner法の形態水準評定についての対応を示すと以下ようになる（Table1, Table2）。

この表から、片口法とExner法との違いは、Exner法があくまでも統計的に検討された出現頻度を手がかりに反応概念とインクプロットの一致度を評定するのに対し、片口法では反応概念の持つ形態の部位とBlotとの形態の一致に加えて、どのように建設的な明細化が行われるかという視点も含めて総合的に反応の質を評定している。この違いはもちろんR+%、F+%（片口法）とX+%、X-%（Exner法）の数値が表す心理学的意味が異なることを示している（この点については後に詳しく述べる）。この点から片口法の形態水準の方がより広い心理学的意味を持つ（Table2）。

次に最も質の高い反応と評定される+評定（片口法ではF-L+, Exner法ではFQ+）について述べる。Exner法の+評定を考える際に筆者らは、

Table1

片口法の形態水準の段階とその評価の仕方（片口, 1987, Pp.112-118）に筆者らがExner法の記号を対応させる形で一部修正している

スコア	水準	基準
+	優秀	概念とプロットの一致度（FQ ₀ ）、建設的明細化、結合性（DQ ₊ ）のうち全部あるいは2点が優れている
±	標準	PまたはPに準ずる頻度の高い反応であり、最低限の明細化がある（FQ ₀ ）
干	許容	① 半確定概念の反応（DQ _v ） ② ±水準だが明細化が乏しかったり、弱体化の明細化が行われた場合
-	不良	① 概念とプロットの一致がみられない（FQ-） ② 形態不確定概念（FQ _{none} , DQ _v ） ③ 破壊的明細化、非現実的結合（特殊スコア）

Table2

片口法の形態水準の心理学的意味と Exner 法についての対応 [(片口, 1987, Pp.214-215) に筆者らが Exner 法の考えを比較する形で一部修正した]

スコア	心理学的意味	Exner 法との対応
+	<ul style="list-style-type: none"> 平均以上の知的能力 優れた独創性 行き届いた注意力 豊かな想像性 	<ul style="list-style-type: none"> 「優れた独創性」, 「豊かな想像性」は Exner 法にない評価の観点 Exner 法ではあまり評価されない FQu 反応でも片口法では一致度と明細化等で+反応になりうる
±	<ul style="list-style-type: none"> 社会的常識に沿って, 思考し, 行動する傾向 適応的で平均的な知的能力 	<ul style="list-style-type: none"> 知的能力をも評価している点が Exner 法との違いであろう
干	<ul style="list-style-type: none"> 軽度ではあるが, 統制の弱まり, 現実吟味の低下, 不安, 注意力の低下 適度な場合は, むしろ適度の緊張の緩和と弛緩 	<ul style="list-style-type: none"> 適度な頻度 (20%前後) においては, 片口法では「いくらか気を抜いた」という自我の建設的な力 (創造的退行) として注目されている点が Exner 法にない観点である FQ-のうちいくつかの反応は, この段階の反応と考えられる Exner 法では, FQ-反応にポジティブな意味を持たせていないが, 健常者のプロトコルに-反応がいくつか存在するのは当然だと考える
-	<ul style="list-style-type: none"> 自己統制⁴や現実吟味の著しい低下 極度の不安感 論理的思考の障害 内閉性 	<ul style="list-style-type: none"> Exner 法の FQ-の心理学的意味は, -反応の同質性を検討する。つまり, 形態水準がマイナスになる要因の共通点を探り, そこから被検者の特徴について探る

Table3 Klopfer 法の形態水準と Exner 法の発達水準などの対応

基本点	Exner 法との対応	
1.5	DQo…形態確定的概念で形態が分化した概念 (P 反応でない人間反応)	
1.0	DQo…形態確定的概念で P 反応, あるいは P 水準の形態確定的概念で比較的単純な構造のもの	
0.5	DQv…葉っぱ, 雲などある程度形を有するもの (半確定的概念)	
0.0	DQv…水, 霧など無形態反応 (FQnone: 形態不確定概念)	
-0.5	基本的な概念がプロットと一致しているため形態水準は FQo であるが, 反応に対して弱体化の明細化 ⁵ のため, INCOM や FABCOM がコード化される場合	
	比較的確定的な概念が用いられるプロットに対して半確定的概念が用いられる場合	場合によっては, FQ- (ソフトマイナス) になりうる
-1.0	プロットを適合させようとする努力はあるが, かなりの領域でプロットと反応が不一致が生じている場合	
	基本的な概念がプロットと一致しているため形態水準は FQo であるが, 反応に対して破壊的明細化 ⁶ が行われたため, INCOM2 や FABCOM2 などがコード化される場合	
-1.5	DW 反応 (CONFAB ³)	ハードマイナス
-2.0	CONTAM & PSV (機械的固執)	

Klopfer 法の形態水準評定を応用することを提案したい。Klopfer 法の形態水準評定は, 「基本点+加算点 (Basic Form-Level & Credit)」という考え方である。まず全ての反応に基本点が付与される (Table3)。

その基本点の決定に用いられた明細化 (部分の指摘) の他に, 概念と Blot との一致度を高める明細

化 (建設的明細化) があれば 1 個につき 0.5 点を加算する。逆にあまりに主観的過ぎたり, 病的思考に支配され, 一致度や関連性を崩す説明に対しては 0.5 点を減点 (弱体的明細化・破壊的明細化) するシステムである⁷。そこで「基本点+加算点」の結果の形態水準と片口法の形態水準との対応は以下ようになる (Table4)。この観点を採用すれば,

Table4 Klopfer 法の形態水準と片口法との対応 (八尋, 1993)

片口法	Klopfer 法：基本点+加算点
+：優秀水準	3.0～5.0
±：標準水準	1.0～2.5
干：許容水準	0.5 or -0.5 基本点が 1.0, 1.5 でありながら、明細化の乏しさを弱体の明細化で 0.5, -0.5 になった場合も含む
-：不良水準	0.0～-2.0

Enter 法の FQ+ は、片口法の F-L の +水準の基準にほぼ該当する。

Exner 法の FQ 評定は、その反応内容がその領域にどれほど出現するかの基礎データに準拠している。しかし、片口法の形態水準の評定は、その反応についての明細化を通して概念と Blot が最終的にどの程度マッチしているかを評価する。この知見を援用すれば、Exner 法を用いる際に並行して片口法（ないしは Klopfer 法）での形態水準評定を行うと、1つ1つのロールシャッハ反応の質を理解するのに役立つと考えられる。

(4) 集計表 (Summary Scoring Table) について

片口法の Summary Scoring Table については、明翫・八尋 (2006) で詳しく取り上げた。Exner 法との大きな違いは、反応数や反応時間に関する情報があることである。

① 反応数と反応時間について

Exner 法では、反応数、反応拒否や反応時間に関する情報 (数値) は解釈では取り上げられない。ただし、R が 14 個以上 17 個未満の反応数は、解釈仮説の妥当性が保証されにくいので解釈に際しては慎重に取り扱われる。一方、片口法では反応数と反応時間は、被検者の「観念活動や生産性」と関連づけて評価される。反応数の標準範囲 (20～40) から外れる場合は、その多少の理由について、以下の 4 つの仮説を立てる (片口, 1987, P.163)。

- ・動機付けの強さ・弱さ (敵意? or 協力的?)
- ・防衛や緊張の強さ
- ・情緒的側面 (抑うつ的? or 躁的?)
- ・知的側面 (想像力の貧困さ? or 知的水準・創造性の高さ?)

また反応拒否や失敗については、同じく以下のよう

く (片口, 1987, P.163)。

- ・どの図版で起きたか? (ショックの原因の推測。例えば色彩や濃淡など)
- ・一般的に統覚困難はないか?
- ・統合失調症の思考障害は考えられないか?
- ・うつ病における抑制の可能性は?

Exner 法で施行しても、反応拒否が生じたり、反応数が 14 個未満になる事例も少なからず経験する。そのような際には再施行してより多くの情報を得ることが Exner 法では指示されているが、反応数の少なさや反応拒否に関する片口法の知見があれば、再施行前のプロトコルからも心理学的意味が理解できる。

反応時間について、片口法では集計したデータ反応時間から図版の刺激値、色彩や濃淡などのショックをどのくらい受けているかを検討する。その検討を通して被検者への環境からの圧力を推測するのである。Exner 法では、反応の遅れは判断や決定、言語的修飾の過程によるものであり、そうした過程は反応にあらわれるので計測しなくともよいという立場をとる。それはとりもなおさず、時間を計測しない分だけ、そのニュアンスをプロトコルから読み取ることが要求される。片口法のテスターは、情報処理の早さ・正確さ、精神テンポ、ショックの影響など、反応時間に影響を与える複数の要因から被検者の特徴を検討する。筆者らは、時間計測は数量的データに用いなくとも、被検者のロールシャッハ状況の体験を追体験していくのに有用であるし、Exner 法に準拠していても腕時計等で計測しておくことが解釈に役立つと考えている。

< 初発反応時間の遅れ (片口, 1987, P.164) >

- ・心的機能の低下
- ・防衛的・警戒的な態度
- ・情緒的抑制やうつ状態
- ・ショックの存在の有無 (色彩, 嫌悪カード, 遅

延カード)

<反応終了時間 (RT) との関連 (片口, 1987, P.165)>

- RT の平均値が大きい, 反応数も多い: 被検者は検査に興味を持ち, 協力的である
- RT の平均値が大きい, 反応数は少ない: 協力的にも関わらず, 被検者の無意識の防衛が働いていたか, 想像力が貧困である可能性がある
- RT の平均値が少なく, 反応数も少ない: 検査に関心を持たず, 拒否的な場合が多い

② 把握型について

把握型についての知見は, Exner 法では情報処理という側面で検討する。片口法では, W, D, Dd について, 常に形態水準を考慮し, もう少し広く把握型を捉え, 被検者の知的側面について検討する。Exner 法で解釈する際にも, この視点があれば情報処理の効率に加えて, 情報処理の成功度や質についての情報がより豊かになると筆者らは考える。

例えば, W%にしても形態水準が高い反応が多ければ, 「連想豊かで, 総合力があり, また知的活動に持続性を保ちうる人 (片口, 1987, P.172)」, 「知的能力は高くても, あまりに競争心の強く, 野心的でありすぎ, 対人的な緊張感や要求水準の過度に高い人柄 (片口, 1987, P.172)」が推測できる。一方, 形態水準が低い W 反応が多ければ, 「現実的判断が弱く, 無反省 (小野, 1991, P.109)」を推測することが出来る。

Dd%になると, 形態水準が高い場合, 「知的で批判的 (みずからのイメージに合わせてプロットを切断)」, 「度が過ぎると独断的で意思の疎通性に障害があること」, 「強迫的完全癖」などが推測される (小野, 1991, P.110)。形態水準が低い場合, 「知的な低さ」, 「軽度の躁病」が推測される (小野, 1991, P.110)。さらに片口法は Dd を細分化した点も注目される。下位カテゴリーの dr, dd, de, dr とそれぞれの反応領域の形成の仕方に被検者の認知のあり方が反映される。さらにそれらに形態水準を加味すれば以下のようにまとめられる (片口, 1987, Pp.173-174)。これらの視点を踏まえれば, Dd 反応のその被検者にとっての意味を理解することができる。

- dd: 些細なことに拘泥する, 気の小さい人柄を反映している。またこの反応は, 確かさを追及することによって不安定感を克服し, 理解で

きない, あいまいな部分を排除しようとする態度を表す。

- de: 問題の核心に入ることを避け, 内気で臆病な生活態度を反映するといわれている。自分のことを他人に話そうとしない, 他人と距離をもった冷ややかな人が多い。
- di: 形態質の不良な場合は病的な反応であって, 統合失調症, 分裂病質 (失調型パーソナリティ障害) の人に多く生じやすい。また対人関係において, 過敏で不安を持ちやすい人にも良く見られる。

形態水準の高い di は, プロットの濃淡の微妙なニュアンスに敏感であることから, 知的で芸術的な感覚を持つ人柄を反映する。

- dr: 常識的なことを好まず, 独創性に富む人かもしれないが, 冷たく内気な性質を持つと言われている。

形態水準の高い dr を多く示す人は, 知的で批判的な傾向を持つであろうが, 強調されすぎると他人との意思の疎通が困難で独断的な趣を呈するだろう。これは強迫的な完全癖の特徴でもある。

形態水準の低い dr は, 精神遅滞や軽躁病者が多く示す。

③ 体験型について

体験型についての知見は, Exner 法では統制や思考, 感情など様々なクラスターに影響を与える大きな鍵となる変数である。片口法では, 体験型は Summary Scoring Table の重要な一部であり, 解釈の 1 つの柱として捉えていく。この比較については明翫・八尋 (2006) にて詳しく述べたのでそれぞれの視点を生かすという側面から述べる。

Exner 法に片口法の視点を加えることで, 思考と感情のバランスを様々な角度から検討することが出来る。Exner 法は感情のクラスター, 思考のクラスターにおいて体験型からの情報を基に検討する。片口法では, 運動系列の反応と色彩反応系列の関連 (体験型に関する 3 変数: $M: \Sigma C, FM+m: Fc+c+C', VIII+IX+X/R$) を細かく見ていく視点がある。さらに外的統制 ($FC: CF+C$), 内的統制 (M 反応), 圧縮的・抑圧的統制 ($F\%$) の 3 種類 (片口, 1987, Pp.227-228) を加えると, 被検者の統制のあり方がより詳細に捉えることが出来る。また片口法は, 自己統制の査定に人間運動反応を注目する。被

検者の M が示す能力について、形態水準、W : M, M : FM, M : ΣC の 4 つの視点が被検者の自我機能の査定につながり、Exner 法のテスターにとって参考になるだろう。

体験型について、「内向—外拡の軸よりも、むしろ、両向型か共貧かの方が重要であることがわかる。自らの内面をふくめて、豊かに体験するか、貧しく体験するかの方が優先するからである。その次に、より内向的か、外拡的かがこの体験型では問題にされることになる（空井, 1990, P.82)」。この考えを片口法では F% の数値 (Pp.177-178), 体験型 (Pp.222-223), 情緒の統制 (Pp.227-228) で検討している。この側面について、Exner 法では、ラムダが該当する。Exner はラムダを「情報処理の経済性」に関連づけており、Weiner (1998) は「体験の開放性」と結び付けて心理学的意味を広げている。片口法における F% の心理学的意味の分類は Exner 法の解釈に役立つと思われるので以下にあげておく (片口, 1987, Pp.177-178)。

- F% の高い人 (F% > 60) は、主観的着色をせず、客観的にものごとを認識する態度を反映するとともに、想像力が乏しい、感情を抑制する人柄を示す。また精神遅滞、うつ病、無感動な統合失調症患者に極めて高い F% が見られる。
- F% の低い人 (F% < 20) は、現実の客観的把握に失敗しがちであり、物事をあまりに主観的に見すぎる人柄を示す。F% の低い人の中には、想像力が豊かで知能の高い人も少なくないが、主観的歪曲が強すぎて対人関係が困難であった

り、情緒的に不安定なことが多い。特に体験型が外拡型で FC < CF である場合は、この傾向が目立つ。

- F% の意味づけは、F+ と F- とでは心理学的意味が異なるため、形態水準との関連を考慮せねばならない。

④ 形態水準について

形態水準の数値の出し方は、Exner 法と片口法とは大きく異なる。その点を以下の表にまとめてみた (Table5)。Exner 法の形態水準は反応領域で、状況の明確さ (WDA%, XA%) や慣習性 (X+%, Xu%) からみた現実検討力と安定性を査定するものである。

一方、片口法は決定因との関連から変化に対する柔軟性や現実検討力、自己統制力の高さと安定性を査定していく。例えば、F+% > ΣF+% の場合は、情緒的刺激的の少ない状況において統制がとれる、そのため変化のある人間関係はこなしきれないと理解する。また片口法は決定因との関連性から形態水準を考えるため、自己統制という側面を形態水準で理解していく。

この違いを理解していると、事例研究において両システムの比較をする際に、豊かな事例理解も可能になる。

⑤ 反応内容、P 反応について

片口法では、人間反応、動物反応、解剖反応の 3 つについては数量的分析でも注目していく。人間反

Table5 Exner 法と片口法との形態水準の解釈の違い

Exner 法	片口法
状況の明確さの程度と発揮される現実検討力 XA% : 全般的な状況における現実検討力 WDA% : より明確な状況における現実検討力	状況の変化が比較的限定された状況での自己統制や現実検討力 F+% : 形態反応でかつ、形態水準が±以上の反応の割合 F+% が高ければ、高い知能水準、判断の公共性、情緒の安定性、自我の強さ (Exner 法でいう統制にあたる) を示す
現実検討力の機能低下の程度と要因 X-% : 現実検討力の機能低下の程度 S-% : 怒りの要因が現実検討力に与える影響について	日常生活でのより複雑な変化における自己統制や現実検討力 ΣF+% : 形態優位な反応で、かつ形態水準が±以上の反応の割合 形態反応に色彩要因や運動要因が関与した場合に現実検討力がどう変化していくかという視点
実際の行動の特性の理解 XA% を X+% と Xu% に分解する X+% : 慣習的な行動の割合 Xu% : 個性的な行動の割合	被検者のパーソナリティの中で自己統制や現実検討力が占める割合や安定性 R+% : 全ての反応の中で、形態優位な反応でかつ形態水準が±以上の反応の割合。状況の変化に応じて、現実検討力や自己統制が一貫的に発揮されるのか、状況によって選択されるのかを理解する視点

Table6 P 反応における Exner 法と片口法の対応

	Exner 法	片口法
適度	手がかりが明確な状況で常識的行動が取れる	公共性を示す行動がとれる
少ない	社会的慣習を無視する傾向 非慣習的で個人的な行動	社会的協調性に乏しい 内閉的で適切な対人関係を保持できない 特に P 反応が 3 個以下の場合には診断的にも意味がある
多すぎる	常識的行動への強い関心, 完全主義	常識的すぎる 紋切り型の思考

応からは「対人関係の成熟」、動物反応からは「観念が貧困で紋切り型か内面が豊かかどうか」、解剖反応からは「不安の存在」を理解していく。

P 反応の考え方は、共通点が多いが若干の違いがある (Table6)。Table6 を見ると、片口法では P 反応の高さを、紋切り型の思考、パーソナリティの柔軟性のなさ、緊張の高さに関連させて考える。さらに片口法の方が P 反応に対人関係の側面や診断的側面も考慮しており、それだけ P 反応の心理学的意味を重視している。Exner 法と片口法の大きな違いは、独創反応 (Original response) の扱い方である。この反応は Exner 法では形態水準で評価し、FQu に相当する。O 反応の考えは、Exner 法の FQu 反応の理解に有効である (また片口法の視点からは、Exner 法の形態水準リストが O 反応の判定に役立つ)。P 反応が適度にあれば非慣習性を体験世界・生活空間の広さとして注目する。O 反応の取り扱いについて以下に挙げておく。

- 「P 反応が適度に存在する」かつ「形態水準の高い O 反応」→高い知性と独創性
- 「P 反応が少ない」かつ「形態水準の高い O 反応」→知的で独創的であっても社会的協調性に乏しい
- 「P 反応が少ない」かつ「形態水準の低い O 反応」→精神疾患, 社会適応の難しさ

III. おわりに

Exner 法に片口法の視点を導入することによって、被検者のパーソナリティの独創性や柔軟性などといったパーソナリティ理解を広げる可能性が示唆される。また両システムを用いて事例研究していく際にも、双方の理解が容易になると思われる。今後は第二報として片口法に Exner 法を導入する視点について考察する予定である。

付 記

本論文は、明翫が 2008 年 10 月 3 日に東京都臨床心理士会第二ブロックの研修において講演した原稿を基に、筆者らが加筆修正を行ったものである。

注

- a ロールシャッハ反応を記号化していく作業を、Exner 法ではコード化、片口法ではスコアリングと呼んでいる。
- b 自己統制とは、片口 (1987) が形態水準の解釈の説明によく用いている言葉である。しかし、自己統制力が意味することについては、自分の意思に行動をコントロールしていくという自律に近い概念であると考えられる。
一方、Exner 法では、統制について「状況からの要請に対処するための行動を慎重に決定あるいは実行する能力 (Exner, 2000; 中村・野田監訳, 2002, Pp.37-38)」と明確に定義している。
片口法の「自己統制」と Exner の「統制」は、類似した概念であると考えられるが、それぞれが関与している、反映されているとされるロールシャッハ変数に若干の違いが認められるので、本論文では「自己統制」と「統制」を区別した。
- c 加算点 (Credit) について、Klopfer 法に準拠していないテスターには不慣れなシステムであるので基本的な考え方を以下に述べる (本明, 1959; 八尋, 1993)。
 - (1) 建設的明細化: プロットと反応の一致度を高める説明をすると、1 個につき 0.5 点を加算する。最高点は 5.0 点までとする。
具体的には、説明の中で反応の基本となる形の説明 (これは基本点で評価している) を除いた他の詳細な説明 (例えば女性の特徴、子どもや老人の特徴や運動、色彩、濃淡などの決定因の説明) には、各 0.5 点ずつ加算しても良い。
また部分を集めて全体で構成されているような場合で、その構成力が良い場合も結合性として 0.5 点を加算する。
 - (2) 弱体化明細化: プロットとの適合性を弱める明細化ではあるが、その重要さが適合の基本的正確さを破壊しない場合。概念を粗野、未熟にする効果がある。0.5 点ずつ減算する。
 - (3) 破壊的明細化: プロットとの適合性を落とす明細化であり、その重要さが適合の基本的正確さも

破壊する場合。明細規定が反応の概念に最も重要な点に影響を与える。-1.0とする。

d CONFAB は、現在の Exner 法の記号化体系の中から削除されている。

e Weiner は、体験の開放性が Lamda によって測定され、 $0.30 < \text{Lamda} < 0.99$ の範囲にある被検者は、バランスの取れた注意と関連のある適応的な特性を示すという。

「バランスのとれた注意の焦点化を維持する人々は内的、外的な出来事に合理的に気づき、あいまいさや不確実さに耐え、さまざまな事柄に関心を持ち、柔軟なやり方で状況に対処しうる (Weiner, 1998; 秋谷・秋本訳, P.136)」。

ハイラムダ傾向の被検者は、「自分の世界や自分自身を過度に狭い焦点で捉える傾向 (Weiner, 1998; 秋谷・秋本訳, P.137)」があり、 $\text{Lamda} < .03$ のとき、「体験に対して敏感で、彼らの生活における出来事を鋭敏に認識する (Weiner, 1998; 秋谷・秋本訳, P.138)」。

この観点を、片口法から眺めると、Lamda の値は、F%の数值、体験型、情緒の統制の考えと極めて類似しているといえる。

文献

- Exner, J. E. 2000 *A Primer For Rorschach Interpretation*. Rorschach Workshops (中村紀子・野田昌道監訳 2002 ロールシャッハの解釈. 金剛出版. Pp.19-323).
- 本明寛 1959 ロールシャッハ・テスト:人格診断法. 金子書房.
- 包括システムによる日本ロールシャッハ学会編 2003 ロールシャッハとエクスター:ロールシャッハ・テストの起源と発展. 金剛出版.
- 片口安史 1987 新・心理診断法. 金子書房.
- 小野和雄 1991 ロールシャッハ・テスト:その実施・解釈・臨床例. 川島書店.
- 明翫光宜・八尋華那雄 2006 ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較 (3-2) 片口法の整理・集計・解釈準備段階について. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 5 (2), 35-45
- 空井健三 1990 ロールシャッハ・テスト.土居健郎・笠原嘉・宮本忠雄・木村敏編 異常心理学講座 8:テストと診断. みすず書房. Pp.101-110.
- 八尋華那雄 1993 ロールシャッハのエッセンス (6) スコアリング (2). 心身医療 5 (8), 1114-1116.
- 八尋華那雄・明翫光宜 2004a ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較 (1) 施行法と反応領域・発達水準などの記号化について. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 4 (1), 27-34
- 八尋華那雄・明翫光宜 2004b ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較 (2) 反応決定因・形態水準評定・反応内容・平凡反応について. 中京大学心理学研究科・心理学部 4 (1), 35-44
- 八尋華那雄・明翫光宜 2005 ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較 (3-1) Exner 法の特殊スコアと整理・集計・解釈準備段階について. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 5

- (1), 19-36
- 八尋華那雄・明翫光宜 2006 ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較 (4-1) 事例検討 1 -健常者の事例-. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 6 (1), 19-42
- 八尋華那雄・藤下浩司・明翫光宜 2007 ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較 (4-1) 事例検討 2 -空を飛んだ女性の事例-. 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 6 (2), 27-48
- Weiner, B. 1998 *Principles of Rorschach Interpretation*. Lawrence Erlbaum Associates Inc (秋谷たつ子・秋本倫子訳 2005 ロールシャッハ解釈の諸原則. みすず書房).

(受理年月日 2009年8月1日)